

PHOTO ESSAY

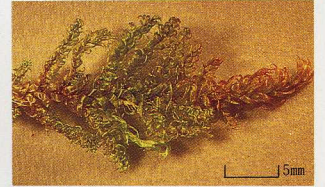
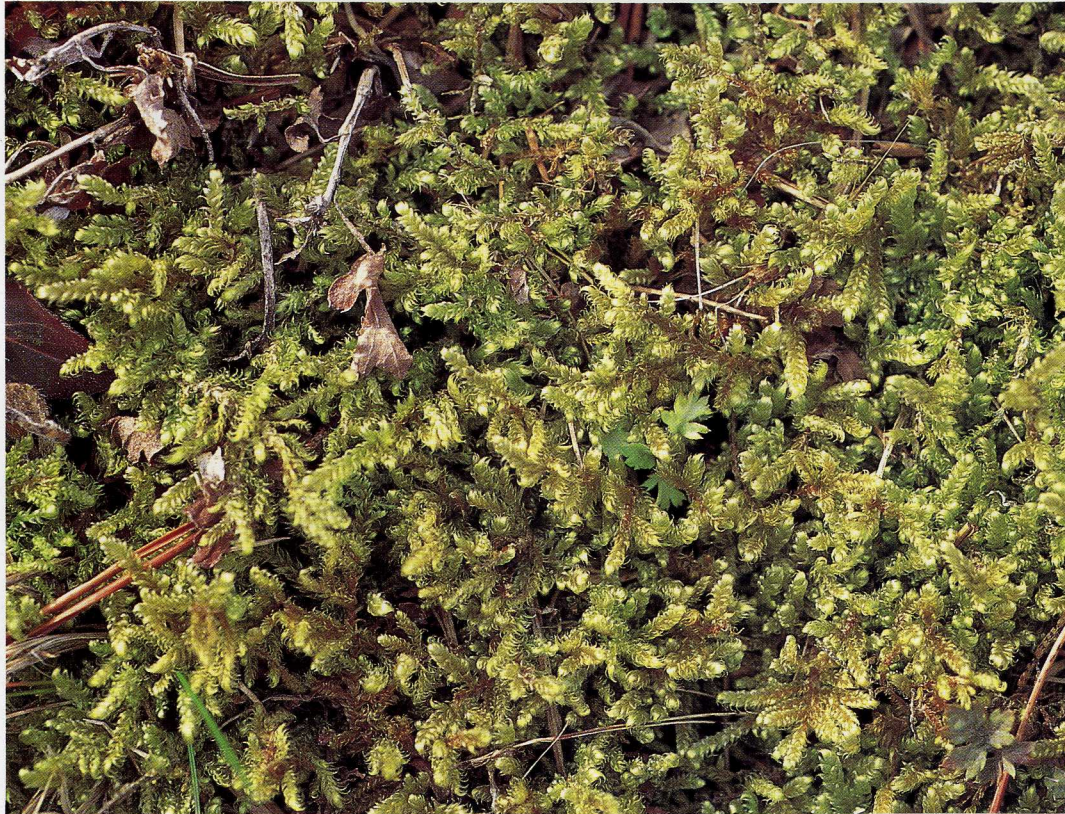
西条キャンパスの自然(植物)

-12-



理学研究科生物学
専攻博士課程前期1年

上野純子



Hypnum plumaeforme

ハイゴケ



こんなところで生えている

二月を迎えたが、早春というにはまだまだ寒い西条キャンパス。空き地や土手の芝生、植え込みの足元や林床の草むらは茶色一色で、その茶色が晩秋からのキャンパス全体に洗みを加え、落ち着いた雰囲気を与えている。しかし、ここでちょっと足を止めて、草地のなかをのぞいてみると、春や、夏には気づかなかった緑のかたまりを見つけることができる。それは、この時とばかりに生き生きと成長しているコケの仲間たちである。コケの仲間たちはすっかり枯れてしまった茶色の草むらが新緑に変わるまでの間、冬枯れの草地に展開し、淡い緑を加えている。

コケという古び、古色蒼然とした長い歴史といったイメージがあるけれども、コケの仲間には造成地のような新しい環境に真っ先に入り込んでいくパイオニア的性格をもったものもある。こういったコケの仲間には、なにも生えていない岩や、樹皮にいち早く侵入し、全体を覆っていくように成長する。そんなコケの代表の一つにハイゴケが挙げられる。そのようなハイゴケが現在の西条キャンパスの自然環境を上手く表現しているのではないかと、ここでみなさんにご紹介することにしました。

ハイゴケの仲間(ハイゴケ属)は世界で約五十種が知られていて、南北両半球の温帯地域を中心に広く分布している。日本には十九種が知られ、北海道から九州にかけて分布し、低地から高山帯にかけて生育している。このうちわたしたちにとってハイゴケがもっとも身近で、たくさん

見られる。ハイゴケは全長10cmにもなり、コケの仲間では大型であろう。日あたりのよい林縁や土手の草むら、草地、芝生の土上、岩上などに這うようにして生えている(和名のハイゴケは「這うコケ」の意。欧米ではこの仲間をガーデン・モスとして親しまれているが、生育環境をよく表わした呼称だと思ふ)。

ハイゴケは胞子で繁殖する植物の仲間である。胞子をつくる準備として、卵と精子をつくり、両者を接合させ、胞子体という世代を発達させておかなければならない。ところがハイゴケは普段、こういった胞子づくりをさぼっているようにみえる。では、そんなハイゴケがどうしてこんなに普通にみられるのかと不思議に思われるかもしれない。

しかし、ハイゴケに限らず多くのコケは、植物体の一部がぎざぎざ、それが発達して新しい個体となるという繁殖方法をもっている。

ところで、苔寺など日本式庭園のコケ庭には、スギゴケやシラガゴケの仲間が用いられるが、これらのコケを庭に育て、観賞するためには、ハイゴケが育つような陽地では難しく、適度な湿度と日陰を与えて時間をかけてやる必要がある。西条キャンパスに大きな森が育ち、しっとりとした落ち着いた環境ができるころ、キャンパスにそんなコケ庭もできていることと思ふ。

広庭の木陰木かげをくまどりとて
苔のさみどりしみむせるかも

伊藤左千夫

(うえの・じゅんこ)